

## 21世紀に向けて

姫路工業大学長

山中 千代衛

1989年、元号が昭和から平成になると同時に世界と日本に激変が走った。ベルリンの壁が崩壊し、両3年を経ずしてソ連邦は消滅し、東西対立の国際2極構造は解消してしまった。戦後半世紀にわたって、わが国は米国の傘の下、ひたすら経済成長に力を注ぎ、GNP世界第2位の経済・生産大国を築き上げてきた。この結果きびしい対米経済摩擦を生みだし、さらに経済は過熱状態となり、その揚げ句の果てバブルは平成3年を境にして一挙に破裂し、一転してわが国は複合不況と言われる長期低迷状態に落ち込んでしまった。政府は6兆円の減税をはじめ、70兆円の大型予算に15兆円に達する公共投資を上乗せして景気回復の対策におおわらわである。しかし、その効果は徐々にしか現れて来ないようだ。今や時代が転換したと考えるべきである。

今までわが国の政治も、外交も、防衛も、産業も、教育も、すべて後進国モデルにより構築されていた。すなわち明治維新以来、いかに先進諸国の域に達するかを一大命題として殖産興産に励んできた。その結果、わが国は大成功を収め、世界に類を見ない高度成長を遂げ先進国の仲間入りを果たすことができた。そして今や経済は成熟期に入りつつあると思われる。換言すれば、社会構造を先進国モデルにより改訂する時期が来たのである。現在あらゆる処で見られるリストラの苦悩は、まさにそのための努力である。

産業について見れば、それはスリムにして個性的な企業の確立であり、他の追随を許さない特色ある技術の育成に外ならない。

山陽特殊製鋼株式会社は昨年創立60周年を迎え、会社として還暦を祝い、今年21世紀へ向けて新しい第1歩を力強く踏み出した。この秋に当たり自社の技術力を世に問う技術誌の発刊を見ることは、誠に時宜を得たもので、慶賀に耐えない次第である。

「鉄は国家なり」とかつて呼称されたことがある。現在においてもあらゆる産業の骨格であり、筋肉である鉄の重要性は多言を要しないであろう。鉄は強靱なる剛性と不断のリサイクル性を併せ持つ文明を支える重要な素材である。この素材技術の中でも軸受鋼など高級特殊鋼を専門とするメーカーとして、山陽特殊製鋼株式会社の存在は大いに注目される。ぜひ益々鉄の持つ優れた特性を生かして広い分野に向けて多機能化につとめ、さらに環境負荷の低減化の研究を推進し、会社として独自の個性と生産性の向上に努力し、ハイテク社会に重要な貢献を果たされるよう心より期待するものである。

西播磨テクノポリスでは科学技術庁の指導の下に、理化学研究所と日本原子力研究所の緊密な協力により大型放射光施設SPRING-8の建設が着々と進められている。現状より判断すると、使用開始は予定の平成10年より相当早くなり、平成9年には放射光の発生が期待できそうである。姫路工業大学は、大型放射光施設と協力し既存の工学部、理学部の外に平成6年度より新たに高度産業科学技術研究所を発足させる。同研究所は光科学技術開発分野と光応用材料開発分野において地域産業と共同研究を進め、また一方では産業人のリカレント教育を実施し、地元企業の人材養成に役立つと共に、地域のセンター オブ エクセレンス (COE) として機能していく計画である。ぜひ関係者のご協力をお願いしたい。

おわりに、この度の技報発刊に重ねて祝意を表すると共に、山陽特殊製鋼株式会社の今後の発展を強く期待するものである。